Ⅰ-1-2

鯨墓と鯨供養を再考する
－生命観・儀礼・記憶－

総合地球環境学研究所
秋道　智彌

日本各地には、鯨墓や鯨を供養する塔、塚などが残されている。鯨の供養祭が営まれることもあり、その意味をめぐっていくつもの議論がある。時代や地域によって鯨の墓や供養の由来、建立の経緯は多様であるので、その意味について統一見解を得るには至っていない。たとえば、捕鯨の社会経済史的な観点からしても［福本 1993］、鯨墓が縄文時代から現代まで一貫してみられたものなのかは議論の余地がある。ここではこれまでの研究成果を集約するとともに、人間とクジラとのかかわりを、生命観、儀礼、記憶をキーワードとして検討することで鯨墓と鯨供養について考えてみたい。

1　供養墓を考えるヒント

まず、供養墓を考えるうえでヒントとなる点を三つ挙げてみたい。第1は、動物を消費するのか（＝致死）、非消費なのか（＝非致死）のちがいに対する考え方である［秋道 2009 a］。野生動物はカミの創造物であるから消費は「悪」であり、家畜は人間の管理下にあるから消費しても悪にはならないとする考え方がある。しかし、野生動物はカミから人間への贈り物であるから、それへの感謝の気持ちは儀礼や供養碑の建立を通じて表すのだとする考えもある。一方、消費しない場合の例として、イヌやネコなどのコンパニオン・アニマルの例を挙げたい。愛する動物が死んだ場合、それに対する哀悼の意を表すものとして供養碑（塔）が建立されることがある。

第2に、その動物が有益か有害かの判断基準が重要である。有益な場合、その動物に対する感謝や恩恵への気持ちから供養塔や墓が作られることがある。しかし、有害な動物の場合、ふつうは何もされない。皮膚を刺す蚊は有害であり、マラリアやフィラリアなどの疾病の元になるから、それを殺したことで供養することはない。

第3は、人間が動物を殺す生産者であるのか、あるいはその肉を食べるだけの消費者であるのかというちがいである。生産者である場合、殺生への観念や生き物とのバトルを行なう点で、犠牲となった動物への畏敬の念や殺したことへの慙愧（ざんき）の念が供養につながる場合を想定できる。一方、消費者である場合、食べることで感謝の念を抱くことがあり、この場合も供養につながる可能性はある。

しかし、以上のような枠組はかならずしも妥当でないことがある。たとえば、消費と非消費がある地域や特定の情況下でともに存在する場合がある。たとえば、日本ではイルカを含む鯨類は水族館で展示されるとともに、鯨料理屋で食材として提供されている。もっとも、その種類はふつう別である。一方、水族館で展示される魚が料理用に消費される例は枚挙にいとまない。

また、有益と有害のちがいといっても、そのどちらにも当てはまらないカテゴリーの動物も存在する。われわれはこれを「ただの生き物」と称しており、食物にもペットにもならない存在は大変多く、これらの生き物はふつう供養の対象にならない。さらに、昆虫を採集する昆虫マニアは、殺した昆虫を供養するようなことがあるのだろうか。これに対して、すべての生き物は成仏するとする悉皆成仏思想が日本にはあることを覚えておきたい。

つぎに、生産者と消費者は独立して存在するのではなく、両者が同一である場合が小規模な社会でふつうにみられる。たとえば、ある世帯で夫や男性成員が狩猟・漁猟を通じて生き物を殺し、集落で女性が解体・調理し、そのあと全員で消費する例がある。

最後に、生き物（とくに動物）の大きさと擬人主義（anthropomorphism）の関係からすると、小さい生き物と大きな生き物への感情移入の程度は同じでない。大きな生き物へは感情移入や関わりに対する意識が覚醒されるが、小さな生き物にはそれが希薄になる傾向があるのではないか。そのことが、動物を供養する行為につながる可能性は大きい。いずれにせよ、日本の場合、大根供養、針供養などの例もあり、供養について包括的に説明する考え方は見出しにくく、時代的、地域的にも重層的なものであることを認めざるをえない。

2　クジラの標し

鯨を供養し、祀るうえでいくつもの標しがある。それらについて整理しておきたい。

鯨墓：クジラの遺体を埋葬した墓で、何らかの墓標があるのがふつうである（写真1）［吉原 1997］。山口県長門市青海島・通浦の向岸寺には鯨墓がある。これは元禄5年に造られたもので、約70の仔鯨の遺体が埋葬されている。また、この墓を管理する向岸寺には『鯨鯢過去帖』が残されており、死んだクジラの戒名、鯨種、性別、大きさ、寄進した人の名前などの関連する情報が記述されている。なお、現代においてもクジラを弔う過去帖が向岸寺にあり、定置網に掛かったミンククジラを弔うための「鯨の過去帖」が現住職によって継続されていることは注目すべきである［フリーマンほか 1989，秋道 2009 b］。

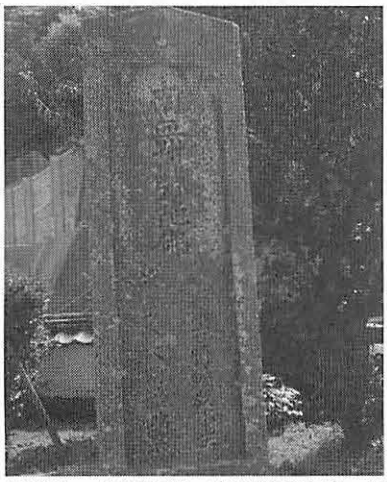

写真1　クジラ墓ー山口県青海島・通浦の向岸寺、元禄5（1692）年建立ー

鯨塚：クジラに関わる記憶・出来事・願望を石･木などで製作した構築物。内容が明示されていないことが多く、伝承として語り伝えられる場合を指す。

鯨碑：クジラに関わる記憶・出来事・願望をおもに石で製作した構造物。クジラと人間や地域と

の関わりが碑文として刻まれていることが多い（写真２）。

写真２　クジラ供養碑ー和歌山県太地町・梶取崎　昭和54（1979）年建立ー

鯨廟：クジラの骨ないし遺体を祭祀の目的で安置してある宗教的な建造物（写真3）。

写真３　　クジラ廟ーベトナム・ニャチャンー

鯨位牌：寺院などの仏壇に鯨霊などと書かれた位牌を安置して祈る。宮城県・鮎川の観音堂に安置されている位牌には「鯨霊魚霊畜霊各諸精霊」と記されている。（写真４）。

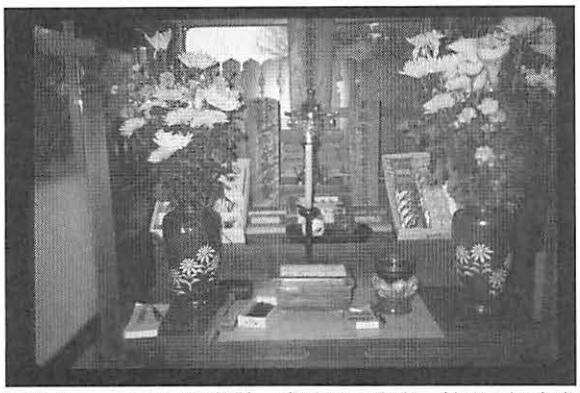

写真４　　クジラの位牌ー宮城県石巻市・鮎川の観音堂ー

大阪市上新庄にある瑞光寺（ずいこうじ）では、近世期に寺の住職が紀州・太地を旅したとき、現地が飢饉に見舞われていた。そこで、豊漁を祈願したところクジラが獲れた。それ以来、太地からは50年ごとにクジラの骨を寄進することとした。その骨を使って建造された雪鯨橋（せつげいきょう）が境内にある［秋道 1994b］。この寺には、クジラの霊を弔う位牌が安置されている。

3　クジラを祀る民族例

鯨墓や供養の慣行は日本に特有のものではない。ここでは日本以外の事例を紹介したい。

1）ベトナム中南部のニャチャンにある鯨廟では、クジラの骨が安置されている[Ruddle 1998]。クジラは現地でca ong、すなわち「魚の主」と称されている。Caは「魚」、ongは「翁、主」の意味である［秋道 1994a］。クジラは沿岸に魚をもたらしてくれる存在と考えられている。日本でも、クジラが魚群を人々にもたらしてくれる存在であり、「エビス」と位置づける場合もこれに類する例である［大隈 2003］。

2）噴火湾アイヌのクジラ送り儀礼（フンペサパアノミ）

噴火湾アイヌは、シャチをカムイフンペ、すなわち「カミのクジラ」と位置づけている。なぜなら、シャチは沿岸にクジラを追い込んでくれる存在であり、人々に海の幸をもたらしてくれるからである。カムイは「カミ」、フンペは「クジラ」一般を示す言葉である。人間がクジラを消費したあと、その頭骨をカミの国に送る儀礼がおこなわれた。

その送り儀礼では、いくつもの種類の削りかけ（イナウ）が用いられる。それらは、シュトイナウ３本（フンペの霊がカミの国にもっていくイナウ）、シノイナウ２本（シャチに捧げるイナウ）、シュトイナウ２本（レブンカムイの従者のイナウ）、ハシナウカムイイナウ３本（漁のカミ、クジラの霊を無事にカミの国へと守護する）などである［名取 1997］。

3）ギリヤーク人は、捕獲されたシロイルカ（ベルーガ）の頭骨を木に吊しておく風習がある［秋道 1994a］。

4）チュクチ人とコリヤーク人は、捕獲したホッキョククジラの頭骨を放射状に並べておくことがある。縄文時代の東釧路遺跡からは、ネズミイルカの頭骨を放射状に並べた遺物がみつかっている。頭骨にはベンガラが塗り付けられており、イルカの骨を死者の国に送る観念が存在したことが示唆される。オホーツク期の遺跡である礼文島香深井（かぶかい）A遺跡でもクジラの骨を積み上げた遺構がみつかっている［秋道 1994a］。

5）チュコート半島のチュクチ人によるマシク遺跡では、ホッキョククジラの骨を立てて並べた回廊式の構造物がみられた。考古学者のあいだでは、クジラ小路と呼ばれている［Krupnik 1987］。

6）函館にある縄文中期の桔梗２遺跡から小型のシャチの土製品が出土している。何らかの呪術的な意味がこめられていたことが推定される［秋道 1994b］。

4　クジラへの観念

クジラに対して、人間はさまざまな観念を抱いてきた。どのようなかかわりがそのきっかけとなったのか。これらを整理すると、以下のようになる。

1）恐れ

近世期の石川・金石では、クジラは「沖の殿様」、つまり人間を襲い、船を転覆させる強大な力を持つ存在として恐れられていた。

2）祟り

夢枕で命乞いをした親子クジラを実際に捕獲したために、人が死んだり、家が破産、疫病の蔓延などの不幸が起こった。これはクジラの嘆願を無視した人間の傲慢さに対する祟りであるとする伝説が全国各地に伝承されている。

3）感謝

海岸に漂着したクジラを売却して得た資金で神社や学校を建てることができた。その恩恵に対して感謝する意味を込めたい、とする事例が室蘭、登別、熊野をはじめ各地にある。同様に、漂着クジラが当時の飢饉を救済してくれた。このことへの感謝の気持ちが生まれたとする事例が日南、 西予、三宅島、臼杵などをはじめ全国にある。特殊な例であるが、沖で遭難した漁船を陸まで誘導して漁民を救済したとされる例が気仙沼に伝承されている。

以上のように、近世期、親子鯨を捕獲するさいに仔鯨を仕留め、母鯨がその場を去ろうとしないことを周知したうえで親子ともに殺戮する方法があった。また、捕獲した雌鯨が妊娠中の場合、胎児も死なせるようなこともあった。このように、捕鯨が非情であり、捕鯨者が慚愧の念から仔鯨を弔ったとする場合（山口県長門市青海島・通浦）、飢饉で困窮したさいに寄り鯨のお陰で人間が救済されたことへの感謝とその記憶を継承するためであるという場合（東京都三宅島阿古）、捕鯨が人間の命をも奪う危険な行為であることから、鯨への対決と生命への鎮魂の意を表明するのだとする事例（和歌山県太地）などがある［秋道 2009 a］。

5　クジラ以外の生き物との比較

日本ではクジラ以外に魚や野生の獣、あるいは家畜などの霊を弔うための墓や慰霊碑が建立されることもあり、クジラだけに特化して動物供養を考えることができない。そこで、クジラにおける供養の意味を、クジラ以外のサケや草木に対する観念や実践から検討してみたい。

1）サケ供養

サケの供養碑や供養塔が東北各地にある。これは毎年、サケの豊漁への感謝の気持ちと、サケの生命を頂くことへの供養を表したものである（写真５）［赤羽 2006］。アイヌの場合、サケは「カムイ・チェップ」すなわちカミの魚と称され、カミの国から人間世界に使わされた幸と位置づけられている。チェップは「魚」の意味である。

写真５　　サケの供養碑ー山形県飽海郡遊佐町の牛渡川右岸　昭和52（1977）年建立ー

2）草木塔

山形県の置賜（おきたま）地方を中心に、近世期以来、草木碑が数多く建立されてきた（写真６）。動物の場合はその霊を認めて供養する場合があるが、植物の例はあまりみることができない。カミの世界からの贈り物に感謝し、カミの国への送りの儀礼とする発想もみられない。しかし、近世期に米沢藩が森林の材木を使って生活を成り立たせることができたことへの感謝の気持ちを示すために建立されたものなのか、「山川草木皆悉皆成仏」とする修験道の影響があるのかもしれない［赤羽 2006、やまがた草木塔ネットワーク事務局 2007］。

写真6　草木墓ー山形県米沢市口田沢上屋敷、薬師堂内、寛政12（1800）年8月15日建立ー

6　生命観・儀礼・記憶と供養碑

ここでは、鯨供養碑（塔）を、生命観、儀礼、記憶の3つの観点から整理してみたい。

1）生命観

人間と生き物の距離からすると、クジラを初めとする生き物を「カミからの贈り物」とする場合から、「人間と生き物は共生すべき存在」と考える場合、人間も生き物も「すべて成仏する存在」とみなす場合まで幅がある。

2）儀礼

クジラへの儀礼を行なう場合、カミとの距離に対する観念が重要である。これには、カミの国に霊を「送る儀礼」とする場合、人間とおなじように葬送儀礼を行う場合、肉を消費したことへの感謝祭の場合まで多様である。

3）記憶(の確認)

クジラを供養することには、恩恵を受けた記憶を確認する場合、飢饉を克服することができたことへの感謝を確認する場合、クジラを諌めたことへの贖罪の念を確認する場合までがあるだろう。

つまり、生命観・儀礼・記憶の観点からみるかぎり、クジラ供養のための祭りや墓を造成する意味が重層化していることが分かる。そのことこそが問題であろう。

捕鯨とクジラにかかわる問題は多岐にわたる。ここではクジラの供養について考察してきたが、クジラと人間にかかわる問題を考察するさいに、生き物を殺して食べることは避けて通ることのできない議論である。人類学者のレヴィ・ストロウスが狂牛病について提起した人間による肉食の問題から［レヴィ・ストロウス 2001］、動物食の限界とその意味についても踏まえて考えることの重要性を提起したい。

文　献

・赤羽正春　2006　『鮭・鱒』II（ものと人間の文化史 No.133—II）法政大学出版局
・秋道智彌　1994 a 『クジラとヒトの民族誌』東京大学出版会
・秋道智彌　1994 b 『クジラと日本人の暮らし』ポプラ社
・秋道智彌　2009 a 『クジラは誰のものか』ちくま新書
・秋道智彌　2009 b 「日本くじら物語」『知る楽 歴史は眠らない 8－9月』5－86頁、日本放送出版協会

・大隈清治　2003『クジラと日本人』岩波新書。
・名取裕光　1997「噴火湾アイヌの捕鯨」谷川健一編『鯨・イルカの民俗』（日本民俗文化資料集成第18巻）三一書房
・福本和夫　1993『日本捕鯨史話』法政大学出版局
・フリーマン・ミルトン・M.R.ほか　1989『くじらの文化人類学―日本の小型沿岸捕鯨』（高橋順一訳）海鳴社
・レヴィ・ストロウス・C.　2001「狂牛病の教訓－人間が抱える肉食という病理」（川田順造訳）『中央公論』116（4）
・やまがた草木塔ネットワーク事務局編　2007『草木塔』山形大学出版会
・吉原友吉　1997「鯨の墓」」谷川健一編『鯨・イルカの民俗』（日本民俗文化資料集成第18巻）三一書房

・Krupnik, I.I.　1987.　The bowhead vs. the gray whale in Chukotkan aboriginal whaling. *Arctic* 40(1): 16-32.
・Ruddle, Kenneth　1998　Traditional community-based marine fisheries management in Viet Nam. *Ocean & Coastal Management* 40: 1-22.